

『くまのパディントン』50周年

経営学部
安藤 聡

マイケル・ボンドの童話『パディントン』シリーズが今年で50周年を迎えた。1958年に最初の短編集『くまのパディントン』(A Bear Called Paddington)が出版されたのに続いて翌年には続編(More About Paddington)が、その後『パディントン、街へ行く』(Paddington Goes to Town)、『パディントン、フランスへ』(Paddington Abroad)など十冊を超える短編集が書かれ、また1972年からはボンド自身によってより若い読者向けに再話された絵本のシリーズも始まった。現在では短編集や絵本ばかりでなく縫いぐるみや文房具など様々なキャラクター商品も人気を博している。

このシリーズは一章完結型の短編童話として書かれていて、第1巻第1章「どうぞこのくまの面倒を見てやって下さい」(Please Look After this Bear)はブラウン夫妻がロンドンのパディントン駅で迷子の子熊を発見する場面から始まる。夫妻は娘のジュディが夏休みに全寮制学校から帰って来るのを迎えるために駅で待っていた。子熊は奇妙な帽子を被り、所持品と思われる古いトランクの上に座って途方に暮れていた。ブラウン氏が声を掛けようとする子熊は流暢な英語(それもかなり正統な容認発音)で丁寧に挨拶をし、「暗黒の地ペルーから密航してここにたどり着いた」と話す。首からは「どうぞこのくまの面倒を見てやって下さい。よろしくお願ひします。」(Please look after this bear. Thank you.)と書かれた札が下げられていた。子熊はペルーで叔母に育てられていたが、叔母が(熊の)養老院に入ることになったため、一人で生きて行くために英語を仕込まれて英国に送られたという。ブラウン夫妻はこの子熊を家族の一員として迎えることにして、英語で

通じる名前が必要だと考えてパディントンと命名する。夫人がジュディを迎えに行っている間にブラウン氏はパディントンを駅のカフェに連れて行くが、ここで彼は全身をジャムで汚してしまう。(なお、このカフェは『ハリー・ポッターと賢者の石』第5章の終わり近くでハグリットがハリーを連れて入ったカフェと同じ場所であろう。)ジュディもパディントンを一目見てすぐに気に入り、ジャムでべたべたになった彼はタクシーの運転手に嫌な顔をされつつウィンザー・ガーデンズ32番地(実在しない)のブラウン家に向かう。第2章ではブラウン家に到着したパディントンが初めて英国式の風呂に入ることになり、浴槽の中で溺れたりバスルームの床を水浸しにしたりする。

このように、このシリーズでは一つの章でパディントンが一つの騒動を起こし、ブラウン夫妻やジュディと兄のジョナサン、家政婦のバード夫人らの善意によってハッピー・エンディングを迎える、という類型が繰り返される。初めのうちは英国式の生活に不慣れなパディントンが、無知ゆえに様々な失態を繰り返せることとなるが、次第にブラウン家での日常に慣れて来るにしたがって、その好奇心旺盛で几帳面な性格に起因したより複雑な混乱状態を引き起こすようになる。彼の行動の動機はつねに善意に基づいていて、例えば第8章「消えてなくなる手品」(A Disappearing Trick)で彼は嫌われ者の隣人カーリー氏をひどい目に遭わせているが、これは彼がカーリー氏に復讐を企てたわけでは決してなく、彼は皆を楽しませるために一生懸命に手品を披露しようとしていただけである。こうしてパディントンが引き起こす騒動は必ず、一部を除いた皆にとって結果的に好ましい方向に解決を見ることとなる。

このシリーズは極めて良質なスラップスティックであると同時に、英国文化の入門書としても読むことが出来る。ブラウン家はロンドンの典型的な上層中産階級家庭(いわゆる「アッパー・ミドル・クラス」として描かれており、パディントンの振る舞いも(奇異な騒動を起こすことを除いて)基本的には英国のこの階級の紳士のそれに準じている。例えば第1巻では地下鉄に乗ってデパートに買い物に行ったり、劇場や海辺の保養地に行ったり家でパーティーを開いたり、続編ではガイ・フォークス・ナイト(11月5日の夜)やクリスマス

ス、またカントリー・ハウス見学や釣りやピクニック、また日曜大工を楽しんだりしている。パディントンとは近所のポートベロウの骨董屋の主人グルーバー氏と仲が良く、毎朝11時の茶の時間を一緒に過ごしている（彼らの場合は紅茶でなくココアだが）。このように、このシリーズを読むと自然に英国の中産階級の伝統的な生活様式を理解することが出来よう。またパディントンの好物はマーマレイドのサンドウィッチだが、このようなところも優れて英国的だと言えるし、彼の収集癖や各種の趣味へのマニアックな傾倒ぶりも極めて英国人らしいと言える。

かつてこのシリーズのペーパーバックを読んでいたときに、所々活字の字体が異なる箇所があることに気づいた。よく見たらそれはたいてい買利物の場面か金銭の授受をする場面で、原文でポンド、シリング、ペニーという旧通貨単位で書かれていた箇所を、現行のペーパーバックではポンドとペニーだけの現在の通貨単位に改訂したということらしい。日本語版は当初のテキストから訳されているようで、シリングという単位が頻出する。

このシリーズはロンドンという実在する都市を舞台に（ウィンザー・ガーデンズ32番地は前述のとおり実在しないが）、言葉を話す子熊を主人公とした物語が展開するという、いわゆる「日常的魔法（Everyday Magic）」という範疇に属する作品である。イーディス・ネズピットの『砂の妖精』やP・L・トラヴァースの『メアリー・ポピンズ』と同じジャンルのファンタジー小説だ。だが『パディントン』シリーズにはファンタジーとして少し変わったところがある。それは、ブラウン夫妻が最初にパディントン（とのちに命名される子熊）と出逢った時、熊が人間の言葉を話したことに驚いていたにもかかわらず、この後パディントンと出逢う人々はたいてい、彼の奇行に狼狽したりはするものの、彼が言葉を話すという事実には特に驚いた様子を見せていない、ということである。例えばブラウン氏がパディントンをカフェに連れて行く場面では、周囲の人々はテーブルの上でジャムに塗れて転げ回っているこの子熊を不思議そうに眺めてはいるものの、熊が人間と一緒に食事をしているという事実にはそれほど驚愕していない。タクシーの中でパディントンが行き先を告げたときには運転手がうろたえているが、ブラウン家に

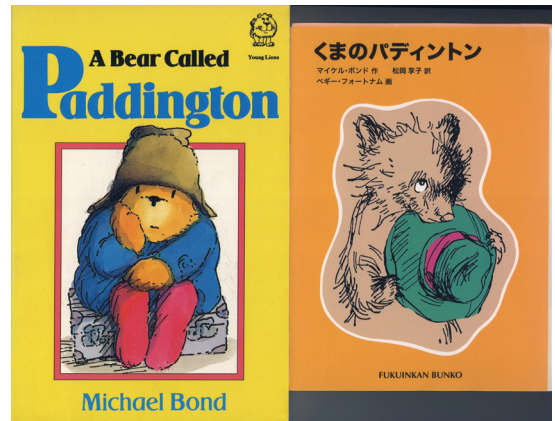
到着するとバード夫人もジョナサンも特に驚きも恐れもせずパディントンを受け入れている。これはおそらく、新たな登場人物が現れるたびに毎回その人が言葉を話す熊に驚くという描写を繰り返していたら読者が飽きてしまう、ということもあろうが、ブラウン夫妻がパディントン駅でこの子熊に出会った瞬間に、言葉を話す熊がいるファンタジーの世界への扉が一度だけ開かれた、と考えると面白い。この後の出来事はすべて、この扉の内側の世界で起こっているということだ。

作者ポンドは1926年にバークシャー州のニューベリーで生まれ、両親の影響で幼い頃から本に親しむが学校生活には馴染むことができず、義務教育を終えるとすぐに法律事務所で雑用係として働いたのちにBBCに転職、第二次世界対戦参戦を経てBBCでカメラマンを務める傍ら大人向けの短編小説や子供番組の脚本も書くようになり、『パディントン』シリーズの成功をきっかけに専業作家となった。1957年のクリスマスの頃、ロンドンのデパートのショウウィンドウで一体だけ売れ残った熊の縫いぐるみを偶然見かけ、それを（当時の）妻への贈り物として買って帰ったという。当時ポンド夫妻はパディントン駅の近くに住んでいたため、その縫いぐるみをパディントンと命名し、そこから靈感を得て子熊パディントンを主人公にした物語を八日間で書き上げ、翌年に出版した。

これまでに多くの画家がパディントンを描いている。最初に短編集に挿絵を附けたのはペギー・フォートナム（1916～）で、独特のタッチの線描画である。今でもこのシリーズにはフォートナムの挿絵が添えられていて、日本語版（福音館書店）では装丁にもフォートナムの絵が使われている（Young Lionsの英語版では物語中の挿絵はフォートナムだが、後述のデイヴィッド・マッキーが表紙画を担当している）。一九七二年に始まった絵本のシリーズではフレッド・バンベリー（1913～99）が水彩で色をつけた線描画を描いているが、のちの1980年からは新しい絵本のシリーズに『象のエルマー』などの絵本でも人気のデイヴィッド・マッキーがやはり線と色彩を組み合わせたイラストを描いている。一方で1957年にパディントンは縫いぐるみと人形と模型を組み合わせたアニメーション（この分野は英国が得意とするところで、『きかんしゃトーマス』や『ポストマン・

パット』といった名作がある) になったが、この時にデザインを担当したアイヴァー・ウッド(1932~2004)がその後『ロンドン・イーヴニング・ニュース』紙に四コマ漫画版パディントン連載し、また文房具などにもウッドのパディントンが使われるようになった。一般に児童文学では挿絵がその他の分野よりも重要であることから、特定の画家が特定の作品(あるいはその作家の他の作品も)の挿絵を担当し、版が改まって挿絵は変更されないことが多い。例えば『アリス』におけるジョン・テニエル、『ナルニア』のポーリン・ベインズ、『グリーン・ノウ』のピーター・ボストン、一連のロアルド・ダール作品におけるクウェンティン・ブレイクなどである。だがパディントンの場合、ブッシュ・ハットとダッフル・コートと長靴、トランクと首から下げた札という分かりやすい目印があるためか、イラストレーターが変わってもそれなりにパディントンらしく見える。最近の絵本シリーズではニック・ワードやジョン・ロバン、また米国ではR・W・アリーといった画家がパディントンを描いている。日本では現在、大垣共立銀行がパディントンをキャラクターとして使っていて、またかつては三井銀行がこの子熊を使っていた(私はその当時の預金通帳を今でも持っている)。英国では最近、マーマイトという食品のテレビCMにパディントンが出演している(パディントンだけ縫いぐるみで、他の人物と背景は絵)。マーマイトとはイースト菌から抽出された黒いジャムのようなもので、英国では普通にパンに塗布して食されるが、外国人には敬遠されることが多い。パディントンを使ったCMはこのようにマーマイトが(主に外国人から)敬遠されることを逆手に取って視聴者を笑わせよう狙ったものである。私が見たのはパディントンがマーマイトとソーセイジのサンドウィッチを作って人に食べさせるヴァージョンと、マーマイトとハムのサンドウィッチのヴァージョンだったが、他にチーズとマーマイトのヴァージョンもあるらしい。(どれもまともな組み合わせでないことをお断りしておく。)いずれのヴァージョンでも、パディントンはそれを美味そうに食べるが他の者たちは顔を顰めたり悲鳴を上げたりして、最後に‘You either love it or hate it.’のキャッチコピーが文字と音声で流れる。

ロンドンのパディントン駅にはかつてパディントンの巨大縫いぐるみが展示されていて、またパディントンのキャラクター・グッズ専門店もあったが、今はパディントンの銅像が立っている。キャラクター・グッズの店は私が知る限りパースに一軒ある。またかつては日本にも、横浜線の町田駅の改札近くにパディントン・グッズ専門店があったのだが、いつの間になくなってしまった。



左：デイヴィッド・マッキー；右：ペギー・フォートナム

日本のテレビドラマに見る 英語教師像

経営学部
安藤 聡

英語教師には奇人が多い気がする。私の恩師を思い出してみても、確かに英語担当者には良くも悪くも個性的な先生が多かった。大学時代の友人の中には現在高校や大学で英語を教えている者が多いが、そのほとんどが英語教師奇人説を裏付けるような輩ばかりである。と言っている私自身が最もそれを裏付けているという声も聞こえなくもないが、もちろん世の英語教師の中にまともな人